

瀬後谷瓦窯出土の土製塔

石井清司

1. はじめに

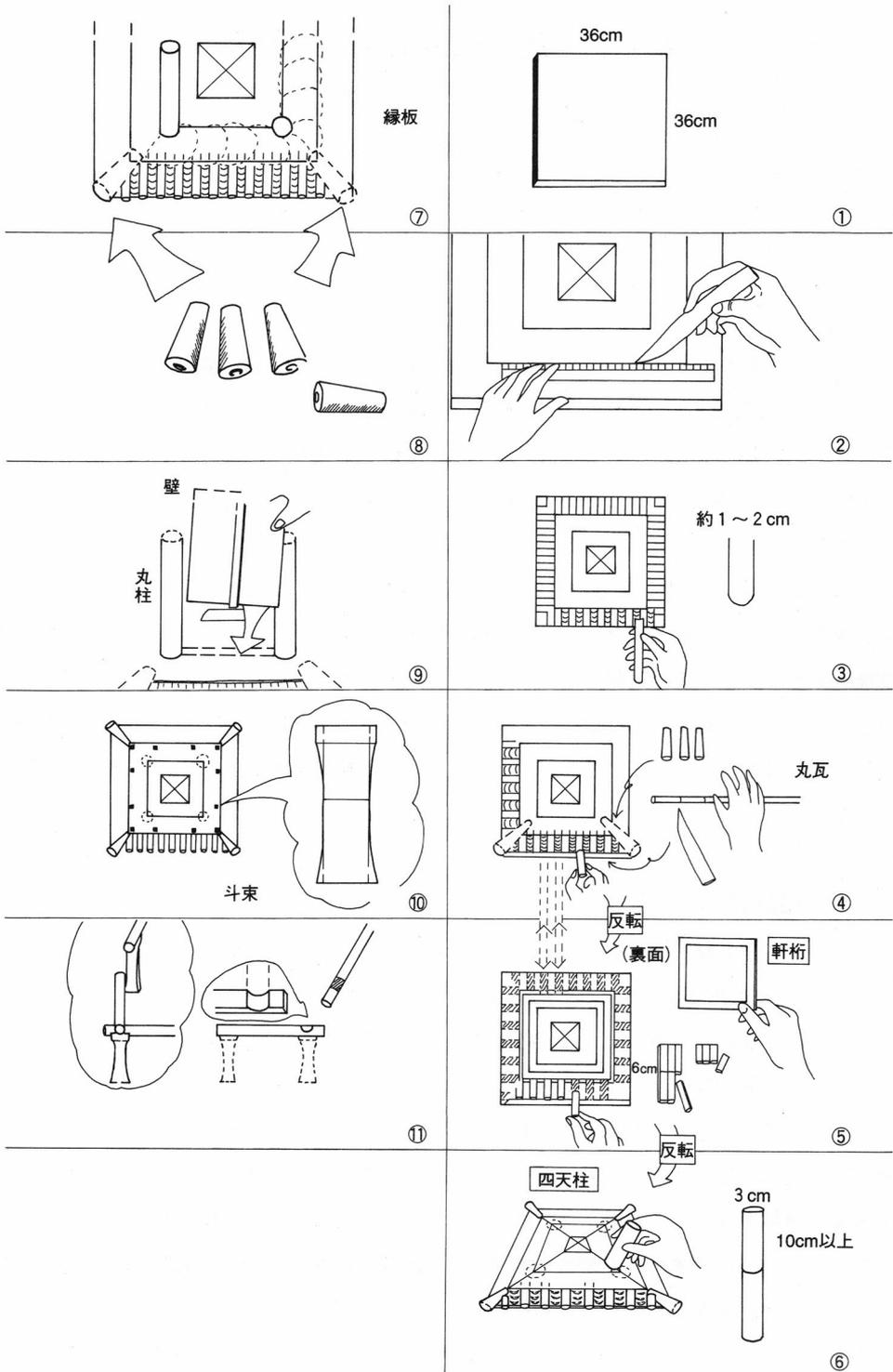
京都府相楽郡木津町瀬後谷に所在する瀬後谷瓦窯では、昭和62年度から平成3年度にかけ4次に亘って試掘及び発掘調査を実施^(註1)し、3基の窯本体と窯本体は削り取られていたが窯の存在を窺わせる灰原2ヶ所を検出した。各窯は出土瓦や土器の特徴から平城京造當時の窯を含めて奈良時代でも比較的古い時期に操業された瓦窯であることが明らかとなった。

この瓦窯では土器・瓦とともに人工釉が付着した塔を型どったミニチュアの焼き物(土製塔)が出土した。この土製塔は京都府下では京都市内で一部報告されているのみで出土例が少ないこと、瓦や土器などとともに窯に関連した灰原から出土しておりその年代がほぼ推定できること、また土製塔のなかでも人工釉が付着した数少ない資料であることから注目されている。瀬後谷窯跡出土の土製塔については、一部図示しているが、細片が多く復元作業には至らなかった。そのため、ここでは復元作業をもとにして、再度、その概略を紹介する。

2. 土製塔の概要

瀬後谷瓦窯の土製塔は、推定4号窯灰原と呼ぶ地点から瓦(平城宮瓦編年のⅠ・Ⅱ期)や土器(平城宮土器編年の2期)とともに出土した。この推定4号窯灰原とは、3号窯の西北方向約7mを中心に東西約4.5m・南北約3.0mの範囲に亘って灰原のみを検出したもので、窯本体は削り取られていて遺存しない。土製塔は推定4号窯灰原のほか推定5号灰原からも出土したが、5号窯灰原の上層に4号窯灰原が堆積していることを考えると、5号窯灰原出土の土製塔は4号窯灰原からの混入の可能性が高い。また1号窯の窯体内の第2次床面を構築するために使用された丸・平瓦に混じって土製塔の基壇と軸部の部位が出土したが、これも4号窯からの製品を再利用した可能性が高く、瀬後谷瓦窯では推定4号窯のみで土製塔を焼成したものと考えられる。

土製塔は、細片を含めて100点以上出土しており、土製塔の胎土・焼成の差異により、3個体程度のものが細片となった可能性が高い。すなわち、水ヒした良質粘土を使用して



第1図 屋蓋部作製作業推定図

硬質の須恵質の焼成に近い一群(A類)、砂粒を多く含み淡(黄)灰色でA類よりやや軟質な一群(B類)、水ヒした良質の粘土を使用しているが、焼成がA類よりもあまく黄灰色を呈するもの(C類)がある。A類には、基壇・最上層の屋蓋部・高欄部などがある。B類には屋蓋部が、C類には相輪部などがある。

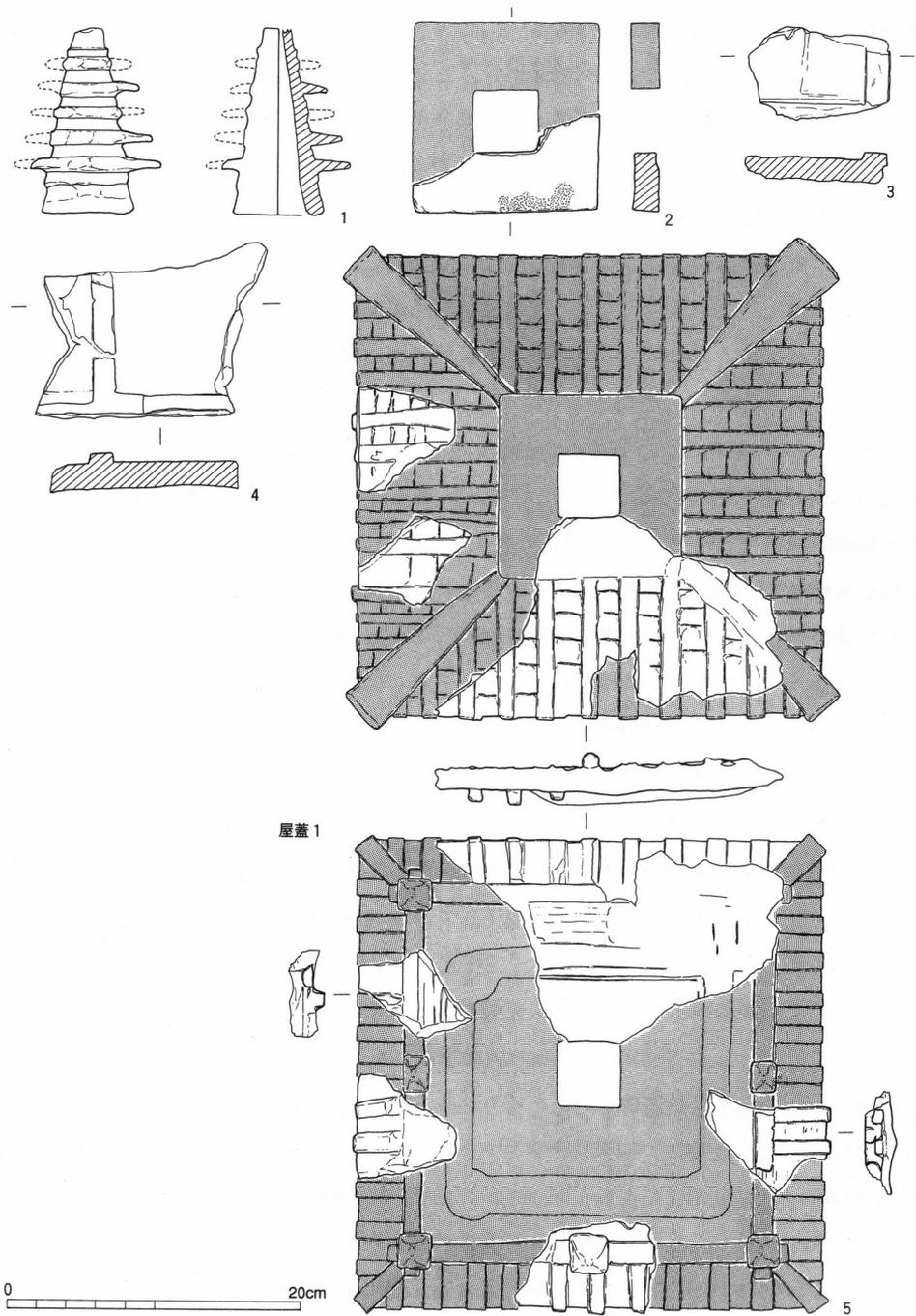
土製塔の各部位の表面には、一部釉が附着しており、この釉が自然釉であるか人工釉であるかを検討するため、正倉院事務所の成瀬正和氏に釉の分析を依頼したところ、鉛を含んだ人工釉であることが明らかとなった。以下、各部位の概略を記述する。

a. 屋蓋部の成形方法

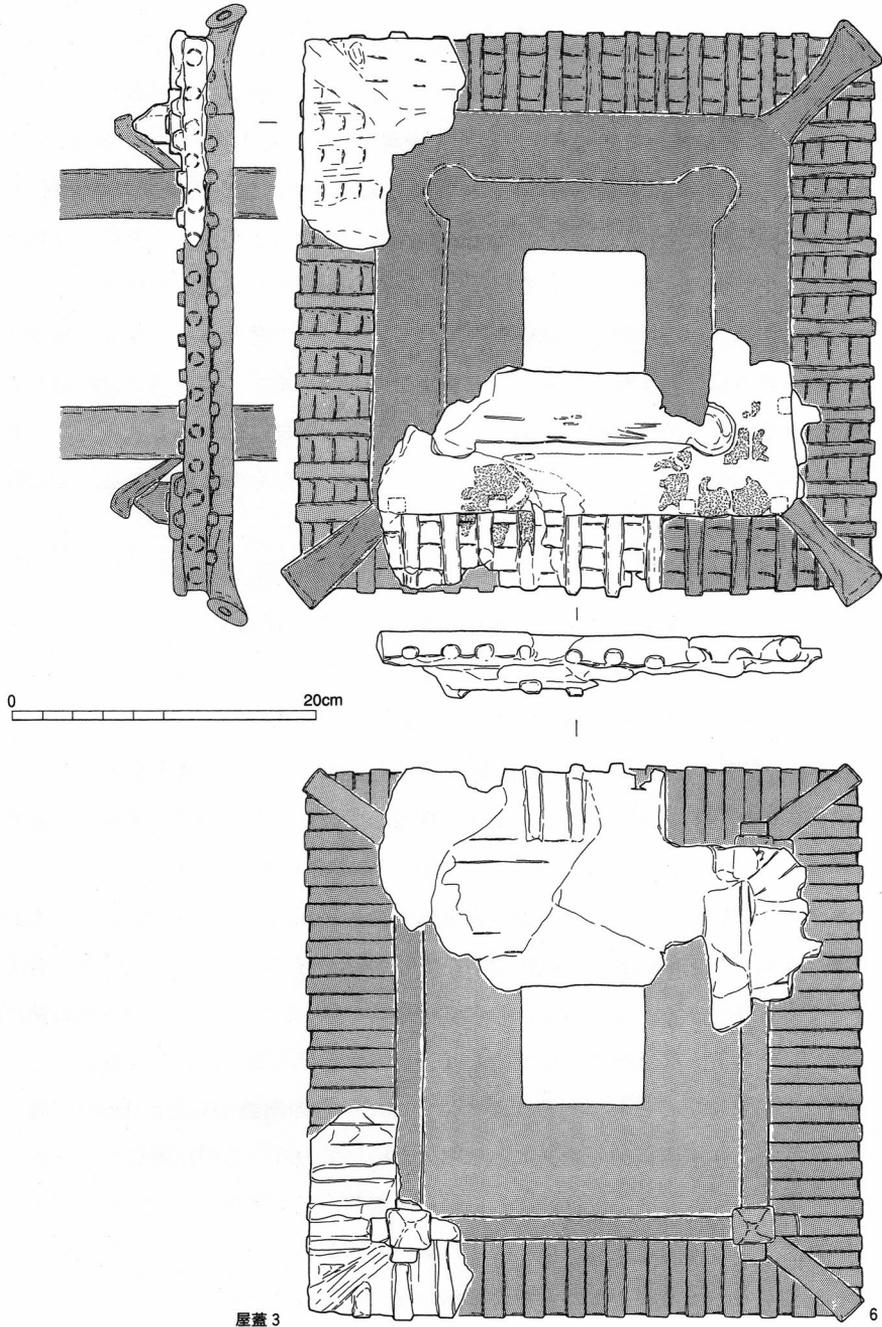
瀬後谷瓦窯では4個体以上の屋蓋の部位が出土している。これらは細片が多く、バラバラの状態出土したが各辺の大きさや隅部の一部が遺存していたため、ほぼ元の状況に復原することが可能である。ここではまず屋蓋部の成形方法をその部位の破片から検討していく(第1図)。

屋蓋部は(1)一辺約36cm・厚さ1.5cm前後の粘土板をつくる。(2)屋根の瓦や縁を表現するための割付線を粘土の表面に描く。(3)割付線に沿って半円形の工具で刻みを入れて平瓦と屋根の傾斜を表現する。(4)平瓦の表現の間に細い円棒を貼り丸瓦を表現する。(5)粘土板を反転させ、裏面の垂木を表現するための断面長方形の棒状粘土を表面の丸瓦に対応する位置に貼り付け、その内側に軒桁を表現する粘土板を貼る。(6)粘土板を正位置に戻し、直径3cmの円棒を粘土板の中心点から上下左右に約4cm前後の位置に立て、軸部となる四天柱を表現する。(7)屋根の上の人がのる縁を表現するために、幅約5cm・長さ約27~28cm・厚さ1.5cmの粘土板を丸・平瓦の表現部分の内側に接するように貼り合わせる。(8)縁を表現した粘土板の四隅の外周部分に丸瓦を表現した円棒よりも大振りやや裾広がり円棒を貼り、降棟を表現する。(9)軸部である壁を表現した粘土を四天柱と縁の内側に貼る。(10)縁の上に手摺り(高欄)の斗束(ますづか)を表現するため、一辺約1.3cm・長さ4.5cmで断面方形の粘土棒を一層につき12個立てる。この際に縁を表現した粘土と斗束を表現した粘土の接着剤として前述の人工釉を使用する。(11)斗束の上部の半円形に挟られた部分に直径約1.5cm・長さ14~15cmの円棒を横に掛けて、手摺りを表現する。この円棒は片面の端から2cm程度内側に半円径の切り込みを入れ、円棒どうしは相欠きの状態で貼り付いている。(12)最後に、四天柱と裏面の軒桁の接する部分に斗(ます)と尾垂木(おだるき)を組み合わせた斗栱(ときょう)を表現した部位を貼り付ける。

このような手順で屋蓋部を成形した可能性が考えられるが、四天柱や斗栱の成形手順についてはなお検討する必要がある。また瀬後谷瓦窯出土の土製塔は三層あるいは五層の塔が考えられるが、いずれもが細片であり、胎土・焼成を異にするため何層の塔であったの



第2図 土製塔実測図(1)



屋蓋 3

第3図 土製塔実測図(2)

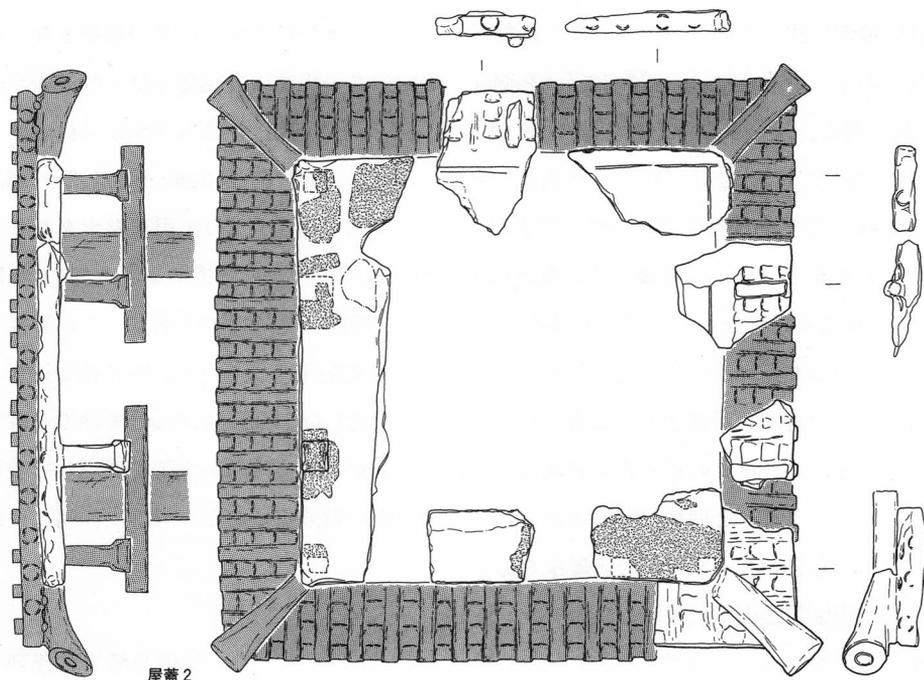
かは断定できないが、各層は屋蓋部と壁をセットで作りそれを接合することなく単に積み上げたものと思われる。以下、復原図をもとに屋蓋部の特徴を羅列する。

b. 屋蓋1 (第2図)

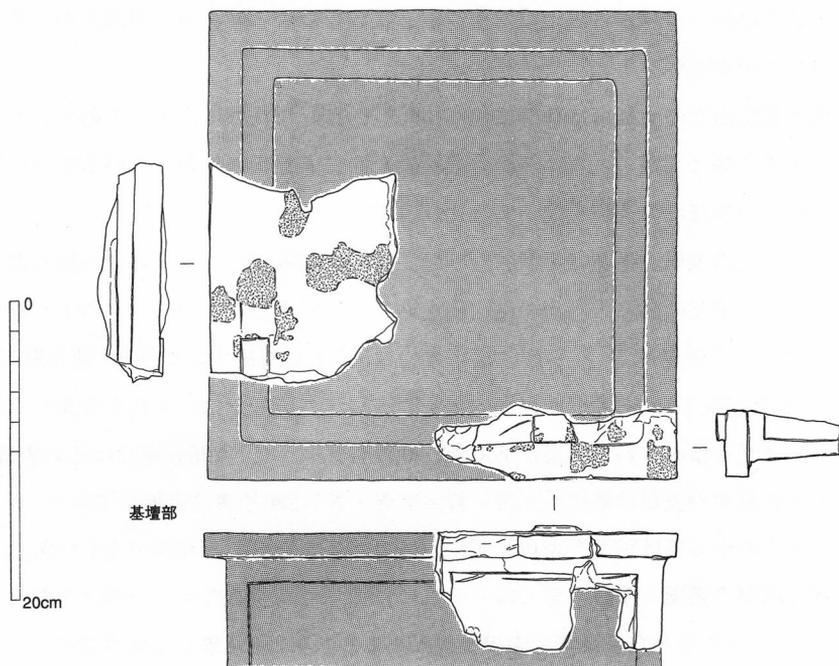
後述する屋蓋2・3にくらべて丸・平瓦の表現がおおぶりであり、裏面の垂木の出(長さ)が短い。表面の丸・平瓦の表現は軒先から中央へ9.7cmまで描かれており、瓦の上にある縁の表現はない。屋蓋1の中央には一辺約4.2cmの方形の透かし穴があり、さらにその外側に一辺約12.5cm・厚さ1.0cmで、屋根瓦を表現している粘土板の厚み1.5cmよりも薄くて段状を呈している。この段状の窪みとほぼ同じ大きさで露盤を表現した粘土板(2)があり、この窪みには露盤をはめ込んだものと思われる。なお、この窪みの表面には粘土板を剥がしやすくするために布を敷いた布目圧痕がある。屋根瓦を表現した部位のうち、その角部は剝離痕があり、この部分に降棟を表現していたものと思われる。裏面の垂木は長さ約3cmで断面長方形の粘土板を貼り付けて表現しており、垂木の内側端には軒桁を表現した粘土板がある。各軒桁を表現した粘土板の交点である隅部には、斗を表現したと思われる一辺2.5cmで先端部が尖った粘土板が貼り付けられていたものと思われる。また軒桁の中央で側柱に相当する位置にも斗を表現した粘土板がある。

c. 屋蓋2 (第4図)

屋蓋2は、最上層の屋蓋1よりも一回り小さく一辺約35.0~35.5cmを測る。屋蓋1と同様、丸瓦は半円形の棒状粘土を貼って表現、平瓦は半円形の工具で軒先より順次削ることにより表現する。平瓦を表現した削りによる段と段の間隔は、屋蓋1に比べて狭く約1.0cmを測る。軒先の平瓦を表現した位置に相当する部分と裏面の垂木を表現した位置の間で軒桁の側面に円形のスタンプ状の文様を押捺している。丸・平瓦を表現した部位の内側には屋蓋1にはない縁と高欄を表現している。縁は四天柱の円柱粘土を立てたのちに、長さ約26.4cm・幅約5cm・厚さ約1.6cmの粘土板を丸・平瓦の表現部分の上に貼りあわせている。縁を表現した粘土の表面の外側で中心より約6.5~7.5cmと約12cmの位置に合計12個の手摺を支える柱である斗束がある。斗束は一辺約1.0cmで高さ約4.0cmの方形の粘土で表現しており、その上方部は幅広となっており、上方端部は架木(ほこぎ)を表現した円棒を掛るために半円形に抉ぐられている。架木は円棒で一方の端部から約2.0cmの位置に半円形の削り込みがあり、他辺からの架木とは相欠きにしており、この位置に斗束を置いている。縁と斗束・斗束と架木の接合には人工釉を接着剤として使用した可能性がある。縁の内側には軸部である壁の剝離痕がなく、また縁の内側がわずかに上方へ外反していて平坦面があることから、この屋蓋2の上面の軸部の壁には各辺に窓のような透かしがあったものと思われる。



屋蓋 2



基壇部

第4図 土製塔実測図(3)

d. 屋蓋3 (第3図)

他の土製塔が4号窯灰原内から須恵器と混在して出土しているものに対して、屋蓋3は、4号窯灰原の中心部分から西南約1.5mの離れた位置で比較的まとまって出土した。屋蓋3は、他例に比べて破片が大きくて、瀬後谷瓦窯出土の土製塔の復原作業の根拠となった資料である。屋蓋3は、一辺約36.4cmを測り、表面の丸・平瓦の表現部分は、軒先から約5.3cmを測る。縁を表現する粘土板の幅は約4.7cmで、縁の内側から約4.7cmには縁の厚さ1.5cmに対して1.0cmと薄い粘土板が巡る。平瓦の表現は、幅1.5~2.0cm・長さ1.2~1.6cm間隔で粘土板を半円形の工具で削って表現し、その間に直径1.0cmの半円形粘土を貼り合わせて丸瓦を表現する。降棟はその剥離痕と他の屋蓋の破片から想像すると、縁の角(隅部)から軒先の角にむかって徐々に粘土帯を厚くした棒状(円形)粘土を貼る。この降棟は垂木あるいは丸瓦の出よりも長く、その端部には円形文を押捺している。四天柱は遺存しないが、縁の内側で屋蓋2とほぼ良く似た位置に直径約1.6cmで深さ1.0cmの丸柱の剥離痕がある。縁は丸・平瓦の粘土帯の表現部分に厚さ1.5cm・幅4.7cmの粘土帯を四周して表現したもので、屋蓋2と同様、その上面(表面)には斗束の剥離痕がある。縁の内側隅には壁を表現したと思われる粘土板の剥離痕がある。

e. 瀬後谷窯跡出土土製塔の特徴

瀬後谷瓦窯出土の土製塔についてその出土状況・成形方法とその特徴を簡単に羅列した。ここでは他の遺跡から出土した土製塔と比較しながら瀬後谷瓦窯出土の土製塔の特徴を検討していきたい。

瀬後谷瓦窯出土の土製塔は他例に比べて比較的良好な状態で出土しており、特に①丸・平瓦の表現②縁と高欄の表現③斗拱の表現④表面に人工軸が付着しているなどに特徴がある。これらの各部位の表現を他の例と比較してみると、

①丸・平瓦の表現 平瓦は半截竹管状の工具で、刻みつけながら軒先へ削りおろして表現し、丸瓦は平瓦の間に半円形の粘土棒を貼り付けて表現している。このような平・丸瓦の表現は埼玉県勝呂^(注2)廃寺(高崎氏の編年案^(注3)では800年を前後する時期)・愛知県NN286号窯跡^(注4)(同8世紀後半)がある。勝呂廃寺出土の土製塔の屋蓋では、丸瓦を表現した粘土棒の上部にも丸瓦を積み重ねた表現があるが、瀬後谷瓦窯・NN286号窯ではその表現がない。屋蓋裏面の垂木の表現は瀬後谷瓦窯・勝呂廃寺・NN286号窯は近似している。

他の多くの土製塔は平瓦を表現せず、円棒で丸瓦を表現するものが大半である。

②縁と高欄の表現 屋蓋上部の縁とそれに付随した高欄を表現した例は少なく、前述の愛知県NN286号窯と奈良県薬師寺出土例^(注5)がある。NN286号窯では縁の部位は不明であるが、高欄部は「地覆と平桁の間二ヶ所に、鋭利な工具で幅0.5cmの切り込みを入れて横連

子を表し、(中略)架木は径1.1cmの棒状粘土を交差させて貼り付け、先端はわずかに反りをもたせている」。薬師寺出土の高欄^(注6)は斗束と架木が接合した状態で出土しており、その形態は瀬後谷瓦窯出土のものに近似している。また表面には二彩釉が施されている。薬師寺出土の高欄は瀬後谷瓦窯出土のものより小ぶりです約2/3程度の大きさである。

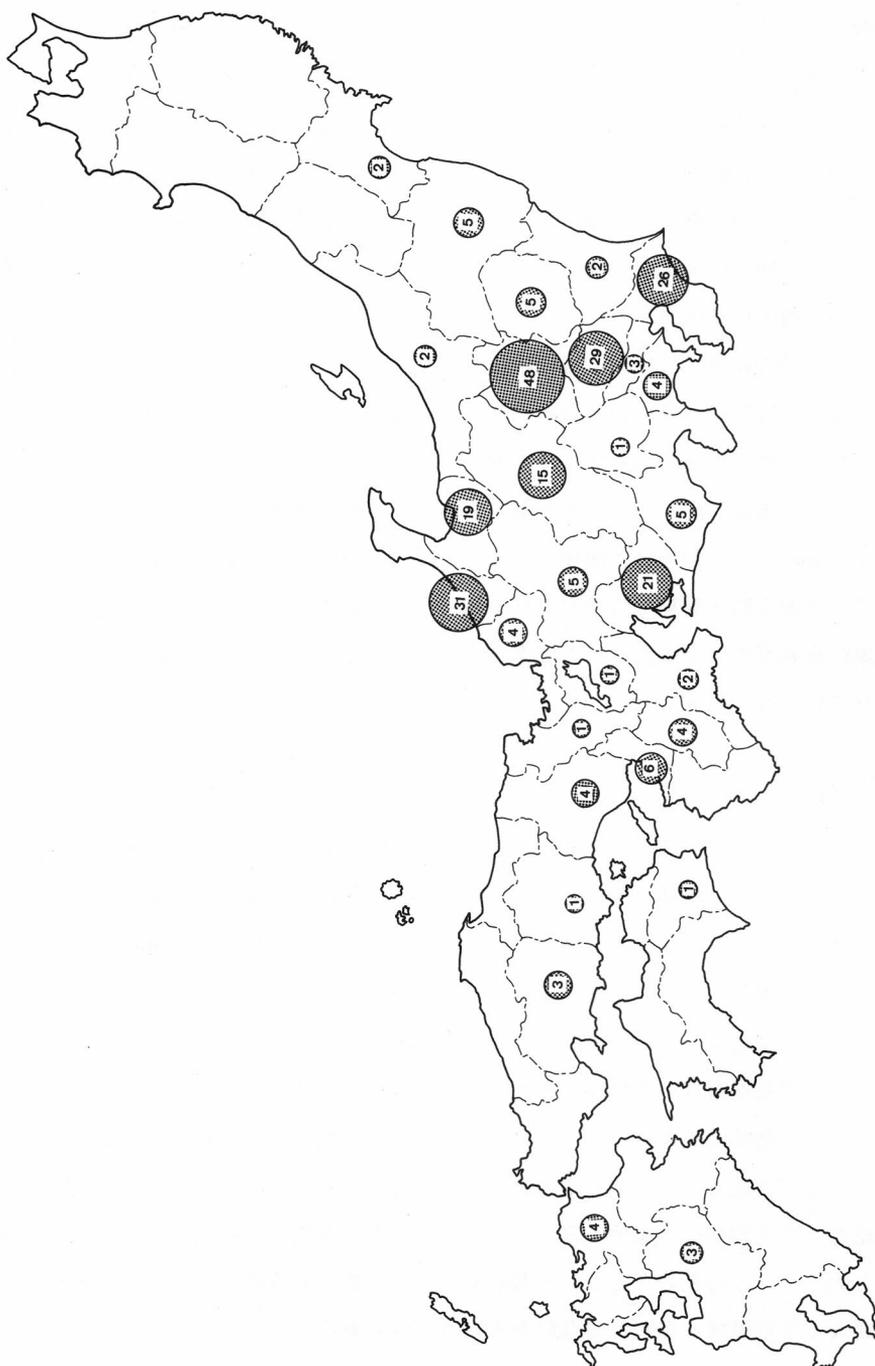
③斗拱の表現 高崎光司氏が指摘するように斗拱は、時代が新しくなると「帯状の粘土を軸部に貼り付け、鋭利なヘラ状工具で斗拱を切り出した『斗拱粘土帯(切り出し)作り』^(注7)」で表現されているが、瀬後谷瓦窯では、粘土帯および粘土塊で成形して各部位を表現している。瀬後谷瓦窯では大斗を表現した部位はないが、丸柱から斜め下方に出る垂木と拱があり比較的実物の塔を模倣している。

④外装 瀬後谷瓦窯では表面、特に屋蓋・基壇・縁など目につく部分に人工釉が付着している。これらは特に各部位の接合部に多く、接着剤として使用した可能性がある。この人工釉は発色が悪く、褐色あるいは暗茶褐色の発色をしており、緑釉瓦塔のような色合いではない。ただ蛍光X線分析によると亜鉛を含み、本来は緑釉瓦塔であった可能性が高い。この表面を施釉した土製塔は、瀬後谷瓦窯に近接してある平城京薬師寺跡でも出土しているが、この2例を除き管見ではその資料を知らない。緑釉以外にも土製塔の表面を塗る例には福島県夏井廃寺^(注8)、千葉県真行寺廃寺^(注9)・萩の原遺跡^(注10)などで軒先あるいは垂木表面などに赤彩されているものがある。

3. 小 結

瀬後谷瓦窯で出土したような土製塔は、管見にのぼるかぎり日本全国で225遺跡から出土している。これを府県別にみると、第5図のように三重県以西の西日本では大阪府の6遺跡を最多とし、他は5遺跡にも満たなく、西日本では出土例が少ない傾向がある。東海地方では、西日本に比べて出土比率が高く、特に愛知県では21遺跡と出土比率が高い。中部・北陸地方では近年特に出土する例が多く、寺跡のほか窯跡などの生産遺跡から出土する例が多い。関東地方は土製塔の出土件数が群を抜いて多く、特に群馬県の48遺跡・埼玉県県の31遺跡・千葉県の28遺跡で、日本出土の土製塔の半数以上が関東地方に集中している。東北地方では関東地方に近い福島県で5遺跡出土しているが、西日本と同様出土例は少ない。各遺跡での土製塔の出土例をみると、寺域内の安置遺構を含めた寺跡からの出土例は65遺跡を数える。また瓦等とともに土製塔を焼いた窯跡は34遺跡を数える。他に小丸山・東山遺跡など墳墓遺構と思われる遺跡からの出土例もある。

瀬後谷瓦窯のように、土製塔を生産(焼成)した遺構には、京都府瀬後谷瓦窯、富山県明神遺跡^(注11)・福山窯跡、長野県菖蒲沢窯跡^(注12)、愛知県NN286号窯・折戸80号窯^(注13)、大阪府鶴田池



第5図 土製塔府県別比較表

^(注14)東遺跡、^(注15)兵庫県岩戸4号窯などがあり、土製塔の多くが瓦あるいは須恵器の焼成と同時に焼成された例が多い。やや特殊な例では埼玉県鳩山窯跡群^(注16)の土製塔焼成土坑のように平面が略円形で断面形がなだらかな傾斜で皿状に掘り込まれた土坑(長径0.83m・短径0.76m・深さ約10.0m)で、埋土内には木炭を多く混じる焼土層があるものもある。土製塔とともに焼成された瓦あるいは須恵器の年代から土製塔の年代を推定すると8世紀前半(国分寺造営以前)には京都府瀬後谷瓦窯と兵庫県岩戸4号窯が、国分寺造営以降の8世紀後半には大阪府鶴田池東遺跡のほか富山県福山窯、愛知県折戸80号窯、長野県菖蒲沢窯跡があり、平安時代以降には、富山県明神遺跡、埼玉県鳩山遺跡などがある。このように現在知られている資料でみる限り、近畿地方を中心に初期の段階では土製塔が生産され、時代をおって東海・北陸・関東地方へと生産遺跡が広がっている傾向にある。

生産遺跡では、京都府瀬後谷瓦窯例が最古(平城京創建に近い時期)の例であるが、寺跡を含めた消費地での例では、滋賀県衣川廃寺^(注17)・大阪府五十村廃寺^(注18)の例が、奈良前期に遡る可能性が高い資料である。衣川廃寺では推定塔跡の版築基壇上層内の心礎掘形の上端から7世紀に遡る軒丸瓦とともに土製塔の屋蓋片が出土している。五十村廃寺では、基壇北縁で瓦積み最下段周辺瓦の中から出土しており、瓦の年代から奈良前期に遡る可能性も高い。また、奈良県薬師寺では中世の土壇内から混入した状態で土製塔の基壇および高欄部分^(注19)が出土しており、中世の土壇内ではあるが奈良時代後期前半に遡る可能性が高い土製塔がある。国分寺造営以後の奈良時代後半には関東地方を中心とした寺跡で土製塔が出土することは前述したとおりであるが、土製塔の生産遺跡と同様、消費地でも国分寺造営以前には近畿地方に集中する傾向がある。

以上のように瀬後谷窯跡出土の土製塔は、その共伴遺物の状況から、土製塔が生産されはじめた初期の頃のものであり、塔の特徴をとらえた製品であることがわかる。また、瀬後谷瓦窯出土の土製塔は人工釉が付着しており、それが薬師寺出土の土製塔のように外装(緑釉)なのか、あるいは部分を接合するための接着剤として使用されたものであるかどうかは明らかではないが、人工釉が付着している例として数少ない資料であることから一部紹介した次第である。

本稿をまとめるにあたっては、岡田英男・森 郁夫・松本修自・高崎光司氏からご教示をいただいた。

(いしい・せいじ=当センター調査第2課調査第2係主任調査員)

注1 石井清司「瀬後谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第51冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究セ

- ンター) 1992
- 注2 石村喜英「勝呂廃寺の創建をめぐる諸問題」『埼玉の考古学』 1987
- 注3 高崎光司「瓦塔小考」(『考古学雑誌』第74巻第3号、日本考古学会) 1989
- 注4 注3に同じ
- 注5 杉山 洋「薬師寺出土の二彩陶塔」(『奈良国立文化財研究所年報』 奈良国立文化財研究所) 1991
- 注6 注3に同じ p18
- 注7 注3に同じ p5
- 注8 いわき市教育委員会『夏井廃寺跡Ⅲ』 1989
- 注9 (財)千葉県文化財センター『成東町真行寺廃寺跡調査概報』 1983
- 注10 日本文化財研究所『千葉県萩ノ原遺跡発掘調査報告』 1977
- 注11 富山県埋蔵文化財センター「富山市明神遺跡Ⅲ地区」(『富山県埋蔵文化財センター所報』第35号) 1991
- 注12 小林康男ほか『菖蒲沢窯跡発掘調査報告』 塩尻市教育委員会 1991
- 注13 日進町教育委員会『愛知県日進町折戸80号窯発掘調査報告書』 1978
- 注14 大阪府教育委員会「西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要」(『大阪府文化財調査概要』 1979) 1980
- 注15 五十川伸矢ほか「第二部 鴨庄古窯跡群」(『丹波三ツ塚遺跡Ⅲ』 丹波三ツ塚遺跡発掘調査団) 1981
- 注16 高崎光司「瓦塔焼成土坑」(『鳩山窯跡群Ⅲ』鳩山窯跡群遺跡調査会) 1991 p301
- 注17 滋賀県教育委員会『衣川廃寺発掘調査報告』 1975
- 注18 柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1983年度』 1984